

地域おこしは縁むすび。

私は地元である東京都多摩市を拠点に地域活動を取り組んでいる。私が得意とするのはアートで人と人とを繋げること。趣味である創作活動に人を惹きつける力があると知り、所属している多摩市若者会議という地域おこし団体の中でアートイベントを企画するようになった。

―初めて企画したアートイベント―

2021年10月末、サッカーチーム東京ヴェルディのイベントの一つとして、多摩市のジオラマづくりを行った。多摩市内の伐採木やどんぐりなどを用いて作る未来の多摩市のジオラマは子どもたちの想像力で素敵な作品になった。完成したものは、11月のヴェルディの試合日に味の素スタジアムに展示をさせてもらった。



2021年10月末の多摩センターでのジオラマ製作イベントの様子



制作したパネルアート



2021年12月におこなったみんなの美術作品展にて撮影。「くらどら」のパネルアートの前に立つ筆者

―誰かの日常になるアート―

2021年末には多摩市の諏訪名店街と永山団地名店街の空き店舗をお借りして、2メートル四方のパネル3枚に油絵の具とアクリル絵具で1ヶ月間パネルアートのライブペインティングを続けた。12月に行われる市民美術作品展へ向けての新たな試みの一つとして取り組んだ。私だけで進めるには期限内に完成させることが難しいと判断し、まずは人数集めから始めた。高校時代の友人を中心に連絡をし、造形物制作が得意な子、油絵が得意な子、デザインが得意な子：多様な友人を集め、それぞれにあつた役割を分担した。

アクリル絵具は比較的乾きやすいが、油絵具は乾きにくい上、高価で、独特な匂いがする。しかしながら、油絵を使用したのには理由がある。大学に入ってから、油絵を描いていることを伝えると、「油絵って

難しそう」や「油絵ってどんな絵具なの?」と返ってきた。私にとってこの返事は衝撃的であり、油絵具に触れる機会が他の絵具以上ないことを気づかされた瞬間だった。どうにか油絵がもっと身近なものにならないかと思い、油絵を1ヶ月間ひたすら描き続けた。通りかかる子どもたちには油絵を実際に体験してもらい、近所の方々から絵のアドバイスをもらうこともあった。中には、毎日同じ時間に「写ルンです」で制作風景の写真を撮り、次の制作日に現像して持ってきてくれるおじいさんもいた。その方に言われた「この作品作りを見に来ることが日課になっていて、毎日の楽しみなんだ」という一言が非常に印象に残っている。私のアート活動が誰かの日常になっていたことを嬉しく思う。また、作品はフォトスポットになるようなデザインにし、その中の一つは商店街にある青木屋という和菓子屋の黒糖生地のだらやきである「くらどら」をモチーフにした。

私が描いている姿を見てどら焼きを買に来たお客さんもいたそう。アートは人と人とを繋ぐ。誰かの日常にもなりうる。

―公園をキャンパスに―

2022年3月には多摩中央公園の活用方法を提案するイベントの中の一つとして企画を立てた。「青空ペインティング」と表し、テントや大きなキャンバスなどに絵具を使って絵を描いてもらった。

準備に手間取り、上手くいくのか心配だった。

たが、結果は大盛況。キャンバスいっぱいの花やカラフルなテント、さまざまな動物の絵で公園が彩られた。子ども頃、絵を描くとなると、どうしても学校やアトリエなどの室内で描きがちだった。もっと開放的な場所ですら、新しい発想が浮かぶのではないかと考え、今回の企画を実行した。

—— ◎ まちづくりは縁結び ——

今挙げたのは企画の良い部分だけ。もちろん、企画を進めるにあたって、何度も失敗をした。

ジオラマづくりのイベントでは、初めてイベントを企画するということもあって、何から手をつければ良いか分からなかった。その結果、イベントの前日の夕方に慌てて買い出しをし、子どもたちが使いやすいサイズに木を切り、他にも材料を用意し……とやることをとことん詰め込んだ。挙げ句の果てにイベント日に雨が降った。震えながら、子どもたちとイベントをした。

ライブペインティングでは、大学の授業の合間に絵を描きに行き、家に帰ったら進捗状況などをまとめて共有し、手伝いに来てくれる子たちのシフトスケジュールを組む。さらにこの合間にバイトや入院中の母の元へ面会に行った。もっと余裕を持って始動していればと何度も思った。

青空ペインティングではイベント日が迫っている中、キャンバスやテントを自主制作したため、とにかく寝られない、とにかく安全に作らねばと必死だった。なれない釘打ち。なぜあんなにも簡単に木



3月の青空ペインティングの様子

が割れるんだ。テントのために、布を縫い付けるにもミシンがないから手縫いでやり始めるも一向に終わらない。考えてみたら「いやー、テントを手縫いで3日間かけて作りまして……」なんて言っている人は現代で私くらいだろう。

そんな失敗や身を滅ぼすようなスケジュールがあっても、無事どのイベントも成功できたのは周りの力とイベントの運営の楽しさがあったからである。私1人ではとても出来ないが、毎日手伝いに来てくれる友人や若者会議のメンバーがいる。毎日絵を描いていると、温かい言葉や若者会議メンバーが美味しいまかないを作ってくれる。そうやって支えてくれる人が1人でもいるだけで、「この人にたくさん笑ってほしいから頑張ろう」と活力になるのだ。だからといって身を滅ぼすスケジュールを肯定するつもりはないが。

そして、イベントを運営していると、人と人との繋がる瞬間を何度も目にする。その瞬間が何よりも好きだ。この文章のタイトルに書いたとおり、地域おこしは縁むすびである。ライブペインティングを見た、通りがかりの人からグループ展示に誘われ、作品展示をしたこともあった。若者会議に入っていたから多摩の歴史や文化に詳しくなり、その学びは歴史民俗学科での勉強に活かしている。そして何より、幅広い世代やさまざまな職の人たちと関わったことで、伊藤千夏という一人の人間がポジティブで行動力のある人間になったのが一番の縁と言える。

—— ◎ ガチャガチャで人と地域を繋げる ——

今、動き出している企画はガチャガチャでまちづくり。ガチャガチャの商品デザインをする夢を抱く同じ多摩市若者会議の立花柚月さんと共にスタートを切った。彼女と共に立ち上げたプロジェクトは「たまごろりん」プロジェクト。多摩とガチャガチャのころころとした見た目がその名の由来である。ガ

チャガチャのカプセルの中に多摩市内の商品情報やクーポンを入れ、ガチャガチャの機械を駅前設置。利用者はガチャガチャをまわし、出てきたカプセルの中に書かれたカフェに訪れるという偶然且つ運命的な体験をすることが出来る。

クーポン以外にもさまざまな仕掛けを施し、多摩市内の飲食店だけではなく、多摩市内を巡ってくれるような仕組みを考えている。

「たまごろりん」を多摩地域活性化のアイデアコンテストに応募し、一次審査を通過。多摩地域の企業との連携が始まり、2022年の10月から京王聖蹟桜ヶ丘駅の改札前に設置開始予定だ。長く続けられる企画にしていこう。

—— ◎ さいごに ——

地域おこしは地域をより良くすることになるのはもちろん、自己表現の場にもなる。自分が好きなことを地域の形に当てはめて、本気で取り組み必ず地域と企画者の両者の心に花が咲く。そしてご縁が生まれる。

筆者の地域活動はまだまだ続く。多摩だけではなく、神奈川大学のある横浜のような、多摩とは条件の異なる地域でも活動していきたい。

【筆者・伊藤千夏】

国際日本学部歴史民俗学科2年。地域活動と商店街めぐりが好き。「ご縁」だと思すぎて、誘われた地域団体にはすぐ入ってしまう能力を持っている。写真は多摩市若者会議の宣伝ポスターになったもの。風が吹いてくれないから必死で布を持って動き回った。

※本文中の画像は全て多摩市若者会議関係者が撮影したものです。

